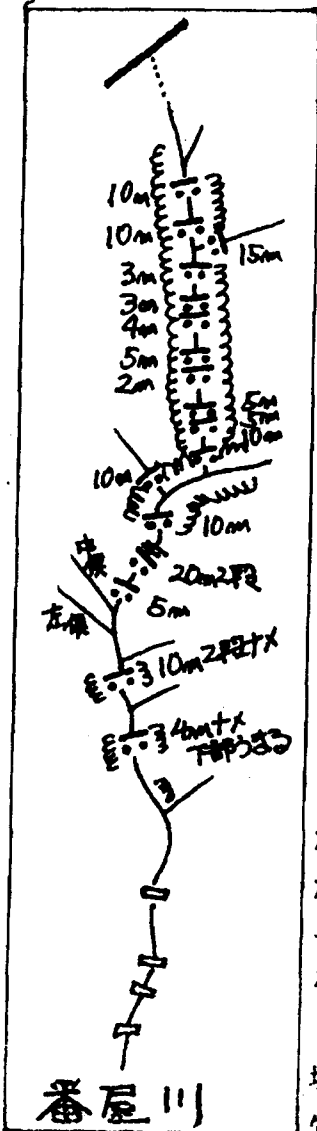


まず、2つ続く3mの滝は軽くパス。F<sub>9</sub>10mもなんなく登る。そしてF<sub>8</sub>~F<sub>7</sub>まで滝が続く。このうちF<sub>7</sub>30mだけは右岸を捲き、アップザイレンで沢に戻る。その先はナメとなっていた。

沢が右に曲がった先に、また大きな滝が出てくる。まず、F<sub>6</sub>40m 4段滝。一番上の10mが少し難しく、左岸より取り付き、水に戻る時ハーケンをうち、A<sub>1</sub>にて登る。F<sub>11</sub> 3段40mの一番上の10mもザイルを出して取り付こうとしたが、ポロボロと岩がはがれてしまうので断念。右岸を捲く。

沢はだんだん急傾斜となってきた、水も少なくなってくる。上へ上へとゆくと、水もなくなり、ヤブこぎとなって稜線の登山道に出る。登山道は廃道に近い。特に唐沢山付近がわかりづらかった。(記)



[タイム] 小玉沢出合(7:40)→二俣(8:20, 8:30)→沢終了(11:15)→稜線(11:50)→唐沢山(12:00)

高沢川 (11/15)

番屋川 I. 1985年8月25日

中ノ坪部落はずれの基地そばに車を止めて、番屋川にそって引かれている用水路ぞいの踏跡をたどって沢へと向かう。

7:45遡行開始。沢には全く水の流れがないうえ、沢幅もそれほど広いとはいえず、これはもう全く平凡な沢だという先入観を持ってしまった。

鋼製堰堤を越え、出合から30分近く歩いた所で砂防ダムに出る。中ノ坪部落からここまで林道がのびてきていた。小休止して出発。

今まで明るかった沢が、樹林帯に入ったことで急に暗くなり、水流も出てきた。所々小さなゴルジュ状となったりして、滝がかかってもおかしくない溪相をしている。だが、いかんせん、沢は荒れており、小さな滝などがあったとしても押し出してきた土砂が埋めつくしている感じである。

8:40待望久しい滝に出会う。4mのナメ状滝。下部が埋まっているのが残念である。軽くクリヤーすると、その先にも10m 2段の滝があった。

8:50沢が大きく三つに分かれる。左と中の沢は荒れており、本流である右の沢が一番土砂の押し出しが少ない。本流にルートをとる。

すぐに5mの滝。そしてそのすぐ先に20m二段の滝。下部がナメ状になっていて、ホールドも多く、直登する。このあたりまでくると、この沢は全く平凡であろうという先入観など吹き飛んでしまい、ひょっとしたら滝の連続する結構おもしろい沢なのではないかという期待感が湧き起こってきた。

兩岸に壁が立ちはだかるようになってゴルジュとなる。沢は急傾斜となり、ぐんぐん高度をかせいでせゆく。ただ、押し出してきた不安定な土砂がいっぱいつままっているので浮石に細心の注意を払いながら進む。

10mの滝を越え、沢が大きくカーブすると、まるでガレ場を思わす感じで岩がゴロゴロしている所に出た。これはなんとも荒れ沢だわいと考えていたら、前方にカモシカの姿が確認できた。

ガレ場状の部分を超した所で小休止。ルートを協議する。直進する沢は細いうえ水の流れもない。左手から合流する沢をつめるのが合理的のようだという結論となって左の沢へとルートをとる。

この沢は細いルンゼ状で、その中に5~10mクラスの滝を次々にかける。いずれの滝にも適当なホールド、スタンスがあり、すべて直登する。

左へ左へとルートをとる。10:10遡行終了となるが、三倉山から上ノ坪部落へ下る登山道(相当に荒れている)に出るまでは、小尾根ぞいに30分程ヤブこぎの必要があった。

(記・

[タイム] 中ノ坪(7:30)→番屋川出合(7:45)→遡行終了(10:10)

### 3. 七ヶ岳周辺の沢

会報No 19に、七ヶ岳南面の2本の沢を紹介した。ここでは、北面の沢3本を紹介する。

赤芝沢

1985年8月1日

姥神林道分岐に車を置いて、赤芝沢に入る。8:45遡行開始。ずっと平凡な河原が続く。行けども行けども河原である。